

## 田部光子試論

——「前衛（九州派）」を超えて

kokatsu reiko 小勝禮子

## はじめに

現代美術家、田部光子（1933年台湾生まれ）は、戦後日本の1950年代末から60年代にかけて全国各地に跋扈した前衛芸術運動グループのひとつ、「九州派」に所属した女性アーティストとして知られている。筆者は、栃木県立美術館で2005年に開催した「前衛の女性 1950-1975」展の調査で田部氏を知り、福岡のアトリエを訪れ、当時から現在におよぶ活動について話を聞くことができた。しかし展覧会では46人に及ぶ出品作家がいたため、田部の作品調査も、福岡市美術館が1988年に開催した「九州派展」カタログに準拠するにとどまり、さらに突っ込んだ分析にまで至らなかったのが実情であった。

むろんこの「九州派展」は、田部の言葉を借りれば、「これなくしては『九州派』は幻のグループとして消滅していたかも知れない」<sup>1</sup>とされる、当時の福岡市美術館副館長安永幸一の先見性と、福岡市美術館学芸員になつたばかりの黒田雷児による「作家顔負けの熱意」による綿密な調査に基づく、膨大な資料を集成した決定版的なものであった。そのため出品作家も30人近くに及び、再び田部によれば、「桜井（孝身）さんの人民戦線路線であまりに広げ過ぎて、（九州派とその）周辺展みたいになつた」<sup>2</sup>という。このとき黒田により作成された九州派年表は、同氏が福岡アジア美術館に転出した後、九州派研究を引き継いだ学芸員山口洋三により、九州派の所蔵作品展示と連動させた改訂作業が今も続いている<sup>3</sup>。

しかしそれでもなお、グループとしての調査からこぼれ落ちてしまう画家田部光子の個人史がありはしないか。初期作品の制作年や出品展などを現在可能な限り特定し、追記した田部光子履歴・展覧会歴（本文の後に別掲）の作成という基礎的な作業をまず行なう必要がある

ことは間違いない。そうした作業が筆者のそもそも目的であったが、その過程で浮き彫りにされてきた田部の芸術のオリジナリティについて、筆者の考えを試論としてまとめておくこととする。この田部年譜は、「田部光子の作品は九州派の枠組みを外して論じられるべきだ」という光田由里の提言<sup>4</sup>に対して、その基礎資料となることを期待するものである。

## 1. 社会的関心と手法の斬新さ

田部の画家としての出発は決して早くはない。1933年日本統治下の台湾に生まれ、女学校時代に敗戦を迎えて福岡に引き上げ、福岡県立浮羽高校に編入学して卒業後、1953年地元福岡の岩田屋百貨店に勤務してから、職場のサークル活動の中でデッサンを学んだという。しかし無論田部がこのときまでまったく美術と無縁だったわけではなく、台湾の女学校時代に友人と交換日記に挿絵を描いたり<sup>5</sup>、浮羽高校時代に友人と演劇活動に熱中して、脚色から衣裳、装置まで自分たちで調べ、中学校を公演して回ったりという、文学、演劇、美術に親しむ学生生活を送っていたようだ。むしろ純粹培養に画家を目指して美大に進んだ人よりも、日常に根ざした芸術に親しんだと言えようか。

その田部が初めて展覧会に出品したのが、1957年8月の「グループQ18人展」であり、これは事実上の「九州派」旗揚げ展であった（このときの田部の出品作品は不詳）。この年から1960年にかけて、田部は九州派のグループ展ばかりではなく、毎年複数の公募展に積極的に出品し、しかも受賞を重ねている。自由美術協会展、朝日新聞社主催の西部女性美術展、九州派が仕掛けた九州アンデパンダン展、そして各展の優秀者を集めた西日本洋画新人秀作展であり、その中で早くも注目を浴びた初期作品が《魚族》と《繁殖》のシリーズであった。

年譜作成に当たって困難だったのは、《魚族の怒り》と題された作品が、田部によれば50号数点と100号1点の複数あり、それぞれの制作年と出品展が特定しにくいことである。記録に残る最初の「魚族」のシリーズは、1958年4月の第1回九州アンデパンダン展（1958年4

月) の目録に記された《魚族1》《魚族2》であり、それは機関誌『九州派』2号(1957年12月)に図版が掲載された作品であるかも知れない(図1)。このとき作者のコメントとして田部は、「自由に泳ぎまわる、とらえがたいものを、とらえて見よう」というのが



図1 石橋(田部)光子《魚族》

私の狙い」と書いていて、いまだ「魚族」に政治性はかぶせられていない。「一定の形がなく、ヌラヌラとねばっこい」魚や貝の形に、「或る面白さ」を田部は見ている。

それが、「第2回西部女性美術展」(1958年11月)と「第2回西日本洋画新人秀作展」(1959年3月)に出品された作品は、《魚族の怒り》という風にタイトルに「怒り」が付けられ、両者の第2回展出品作が50号の作品(年譜で①と表記)であり、それとは別に「第2回九州アンデパンダン展」(1959年5月)にまず出品され、続いて第3回の「西部女性美術展」朝日銀賞一席(1959年11月)と「西日本洋画新人秀作展」金賞(1960年2月)を受賞したのが、現在福岡市美術館に所蔵される100号の絵画(年譜で②と表記、図2)であろうと推定される。残念ながら50号の絵画は写真や図版も現存せず、どのような構図の絵画であったか不明だが、「第2回九州アンデパンダン展」の出品作品写真<sup>6</sup>と、「第3回西日本洋画新人秀作展」金賞を報じる新聞記事(朝日新聞1960年2月27日、西日本新聞1960年2月29日)に100号の絵画の図版(図2)が掲載されているので、これが福岡市美所蔵の絵画であることが同定できる。

「第12回日本アンデパンダン展」(日本美術会、1959年2月)出品作《魚族の怒り》は、50号か100号か不明であり、これらの他に「第3回九州派グループ展」(1959年8月)には《魚の笑いA》《魚の笑いB》と題された作品が出品目録に記載されているが、これについても図版写真は残されておらず、田部本人も記憶にないという。「怒り」が「笑い」に変わったのは、田部流の皮肉な意図であろうか。

《魚族》シリーズのうち、唯一現存する100号の《魚



図2 田部光子《魚族の怒り》 福岡市美術館蔵

族の怒り》は、田部の記憶によれば、1958年3月の結婚以前に実家で既に描いていたというから、50号と100号は平行して制作されたのかもしれない。しかし『九州派』2号(1957年12月)に掲載された《魚族》(1957年制作と推定、図1)と比して、《魚族の怒り》(図2)の造形的な堅牢さと主題の深化は明らかであり、後者の制作年は1957年より後の、1958—59年頃とするのが適当と思われる。

田部は、「魚族の怒り」と題して何を描いたのか。当時の田部の言葉は残されていないが、のちに自著で「五六六年から六〇年の頃の『魚族の怒り』シリーズにしても水俣病が公表されていない頃の作品である。原水爆の実験が重なり、第五福龍丸が死の灰をかぶった頃のことだった。作品の持つ先見性にだけは芸術性があったのだが、そのことへの自覚がなかった。」<sup>7</sup>と書く。第五福龍丸事件は1954年3月1日。この年の秋の団体展には水爆を扱った絵画が多数並んだという。「前衛の女性 1950—1975」展に出品した桂ユキ子(ゆき)の《人と魚》(図3)も、54年9月の二科展に出品されたものである。敗戦後9年、高度成長期に入る直前で、いまだ美術が政治に敏感にコミットする時代であった。

水俣病に関して資料<sup>8</sup>をたどれば、病気の発生の公式確認は1956年5月1日だが、当初伝染病説もあってその後原因の究明に時間を要し、熊本大学研究班が、「水俣病は現地(水俣湾)の魚貝類を食べることによって引き起こされる神經系疾患であり、魚貝類を汚染している毒物としては、水銀がきわめて注目されるに至った」と正式発表したのは、1959年7月22日になっていた<sup>9</sup>。この間、熊本日日新聞、西日本新聞など地元紙を中心に水俣病に関するニュースが報じられていた<sup>10</sup>ので、福

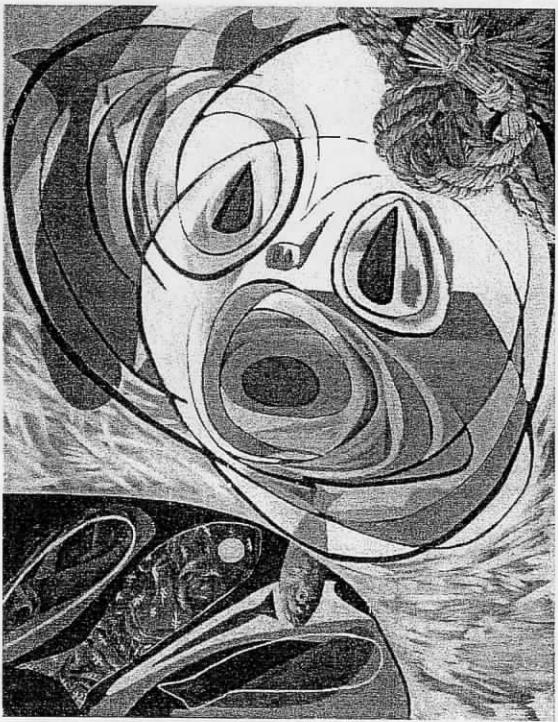


図3 桂ユキ子（ゆき）《人と魚》 愛知県美術館蔵

岡在住の田部には身近であったと思われる。ビキニ環礁の死の灰や水俣湾の有機水銀に侵された「魚族の怒り」を田部が直接的に主題にしたわけではなかったが、同じ時代に生きる人間として、魚や人体を汚染する不遜な力（暴走する科学技術、資本主義）を糾弾する思いが、無意識のうちに込められたのかも知れない。

当時の新聞評によれば、第2回西部女性美術展の出品作（50号と推定）についてだが、「石橋（田部の旧姓）光子の「怒れる魚族」（岩田屋賞1位）はまずアイディアのよさである。魚のウロコを思わせるものを、くりかえし描いていて造形的にもおもしろい」（朝日新聞？1958年11月24日）とあり、現存する100号の絵画にも通じるウロコのモティーフの造形性が注目され、金賞を取った西日本洋画新人秀作展の評では、「田部の作品は魚をモティーフにしたものだが、およそイメージと技術との一つの頂点を示して格幅のある画面」（西日本新聞1960年2月29日）、「スケールもマチエールも、どこに出来ても通用する作品」（嘉門安雄評、朝日新聞1960年2月27日）と賞賛されている。しかし特にモティーフの意味を掘り下げる批評は見られない。九州の地元にありながら、水俣への視点は当時の美術批評にはなかった。

田部自身はこれから30年の後、『苦海浄土』の石牟礼道子をめぐる共著<sup>11</sup>の執筆のために、水俣の地を訪れている。その中で田部は、《魚族の怒り》のウロコの形

の由来と制作方法について書いている<sup>12</sup>。そもそも田部が魚の精密スケッチをしたのは福岡市、志賀島の小さな水族館であり、そこに日曜ごとに通って、ウロコの形が無限に続く六角形であるのを発見したのだという。当時田部は、「九州派」の一員としてアスファルト・ピッチという道路舗装の材料をもっぱら絵画に使っていた。アスファルト・ピッチを鉄鍋に入れて七輪の火にかけ、熱いうちにベニヤ板に流す。その上に電気ゴテで六角形を刻み、さらに竹の筒（竹箒の柄の部分）を2センチくらいの長さに切ってアスファルトに浸してから貼り付けたという。出来上がった画面に魚の具象的な形は見えない。ただ無限に続く六角形の網の目が放射状に画面の中心から外に向けて広がり、その中央に竹筒の輪が蝶集している。アスファルトの黒い地から浮き立つ白と赤の絵の具が鮮烈な、半抽象とも言える画面だが、生物の躍動感が伝わってくる。手法の斬新さが、確固としたイメージを生んだと言えよう。

これと同じ手法で制作されたと思われる《繁殖する》と題された作品も2点現存し、1988年の「九州派展」出品に際して作者の手で修復され、福岡市美術館に所蔵されている（図4、5）。現存作品の制作年と出品展も確實に特定するのが困難だが、1958年8月の「第2回九州派グループ展」出品の《繁殖1》から《繁殖4》までの4点の作品、同年10月の第22回自由美術展出品の《繁殖する》、そして翌59年10月の第23回自由美術展出品の《繁殖する》のうちのいずれかに該当するものと推定される。第23回自由美術展の展評として、嘉門安雄が「石橋の丸い穴のあいた筒状の素材の画面埋め込みは、数が多すぎて一見アリ塚のような気味悪さもあるが、しかしそこに明るい叙情のリズムが呼吸している。」（産業経済新聞、1959年10月27日）と書いているが、これは現存する《繁殖する》（図4、5）の批評として適合する。明らかに竹筒の数が《魚族の怒り》より大幅に増殖して構成の中心を占め、それがざわざわとした生理的違和感をかもし出す。おそらく《魚族》の後に制作されたと思われる《繁殖する》では、この竹筒は魚の「卵」のイメージを連想させる。あらたに貼り付けられた白い陶器の破片も、卵の殻のイメージを増強する。「繁殖」というモティーフは、魚類ばかりでなく鳥獣や人間の生殖にも結びつく。

社会性ばかりではなく、性・生殖への強い関心が筆者の考える田部のもう一つの特徴である。それについては、次節に述べよう。

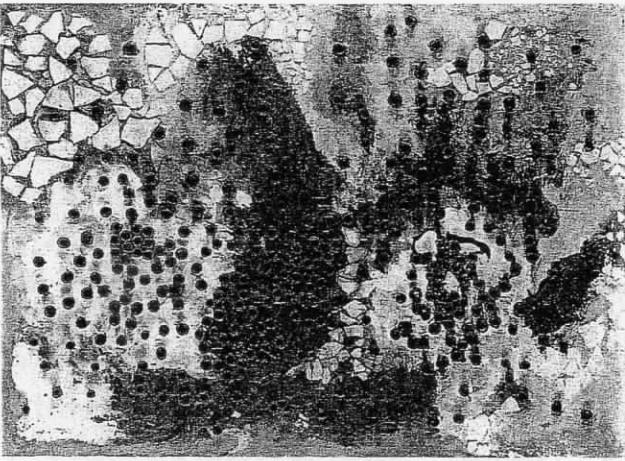


図4 田部光子《繁殖する（1）》 福岡市美術館蔵

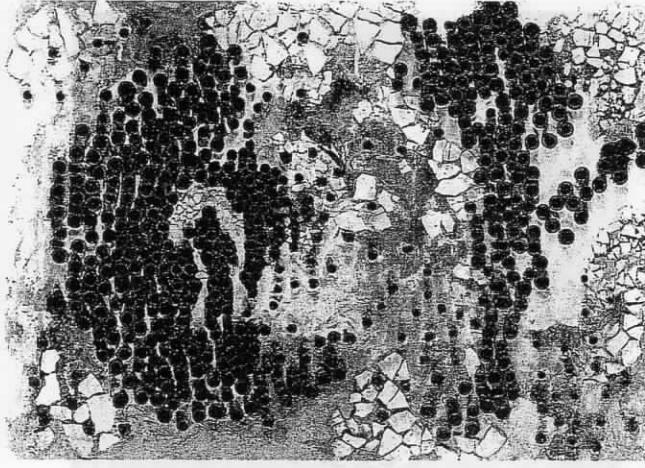


図5 田部光子《繁殖する（2）》 福岡市美術館蔵

## 2. ジェンダー意識の先駆者、女性と生殖

性への関心といつても、表現の主体が男性であるか女性であるかによって、その内容は大きく異なる場合がある。当時から現在までの作品評はほぼ男性批評家に限られていたため、田部の芸術の真の意味が理解されなかつたのではなかろうか。

アスファルト・ピッチを流した大作絵画から、オブジェ制作に移行した1961年9月の「九州派展」(銀座画廊)に、田部は《人工胎盤》(図6)と《プラカード》5点(図7-11)を出品する。東京で最後になったこの九州派展は、「東京地方 九州派 突如来演 総員19名」というキャッチ・コピーが躍るポスターを制作し、九州派と書いた湯飲み茶碗を菊畑茂久馬が作って配るなど宣伝を重視した大衆路線が目立つもので、『土曜漫画』という大衆雑誌(10月20日号)に、「女性器にいどむ芸術家たち」として猥褻的に紹介されている<sup>13</sup>。また『みづゑ』(1961年11月号)では、江原順の「画廊から」という展評のなかで、「九州派が、オモチャ箱をひっくりかえしたような野方図なお遊びを催している。それぞれ力量のある作家でありながら、今度の場合は、おまつり気分に溺れて、仕事を忘れてしまった感がないでもない。」という苦言を呈された。しかしこれまでの九州派年表での引用はここで終わっていたが、江原はそれに続けて、「なかで、田部光子の生理的形態のオブジェ、谷口利夫の『執念』、オチ・オサムの作品などに、それぞれおもしろい可能性を感じられる。」と書いていた。結びは、「むろんこういう自由でとらわれない遊びのなかに、多くの可能性がはらまっていることは認めないわけではないが、そこでみつけられる可能性をもう少し自覚的なものにする方向がでてこなければ話にならない。」となるので、全体として批判的な論調ではあるのだが、「田部光子の生理的形態

のオブジェ」 = 《人工胎盤》に注目する批評が当時ひとつだけあったことは記憶しておくべきだろう。

しかし残念ながら江原の批評には「おもしろい可能性」の内容は汲み取られていない。田部自身の後の回想によれば、《人工胎盤》という作品を発想した背景には自身の妊娠体験があったという。「当時、『九州派』は桜井孝身のスケジュール闘争路線で突っ走っていた。出産休暇も何も無い。わたしは、自分が妊娠したことによって、『真の女性の解放は、妊娠から解放されなければあり得ない』と、勇ましい『人工胎盤』という作品を作って、… (以下略)」<sup>14</sup>

実際、残された当時の写真には、台座に置かれた3点の《人工胎盤》と壁に掛けられた2点の胎児のオブジェを背景に、ゆったりしたブラウスを着た妊娠中の田部が写っている(図12)。残念ながら《人工胎盤》はその後燃やされてしまい、当時のオリジナル作品は残っていないが、幸いなことに熊本市現代美術館の(当時の館長、南島宏の評価による)依頼により2004年に田部によって再制作された(図13)。「前衛の女性 1950-1975」展(2005年)に、この再制作作品を展示することができたのは良いタイミングであった。田部の「再制作メモ」によると、マネキンのお尻の部分を切り取り、アスファルト・ピッチの下地に白いパテを塗り、ピンポン玉、真綿、脱脂綿で飾り、内部に真空管を入れ込むというオリジナルをできるだけ再現しながら、「ビジュアル的には、怖いものではなく、どこか可愛い、懐かしいものを表現しようと」したという<sup>15</sup>。実際、『土曜漫画』掲載のオリジナル作品のモノクロ写真(図14)は、胎盤の開口部を囲むように配されたピンポン玉と、その縁に打ち込まれた太く長い釘が、かなり攻撃的な印象を与えるのに対し、再制作(図13)はピンクの内部と白いふわふわした綿で

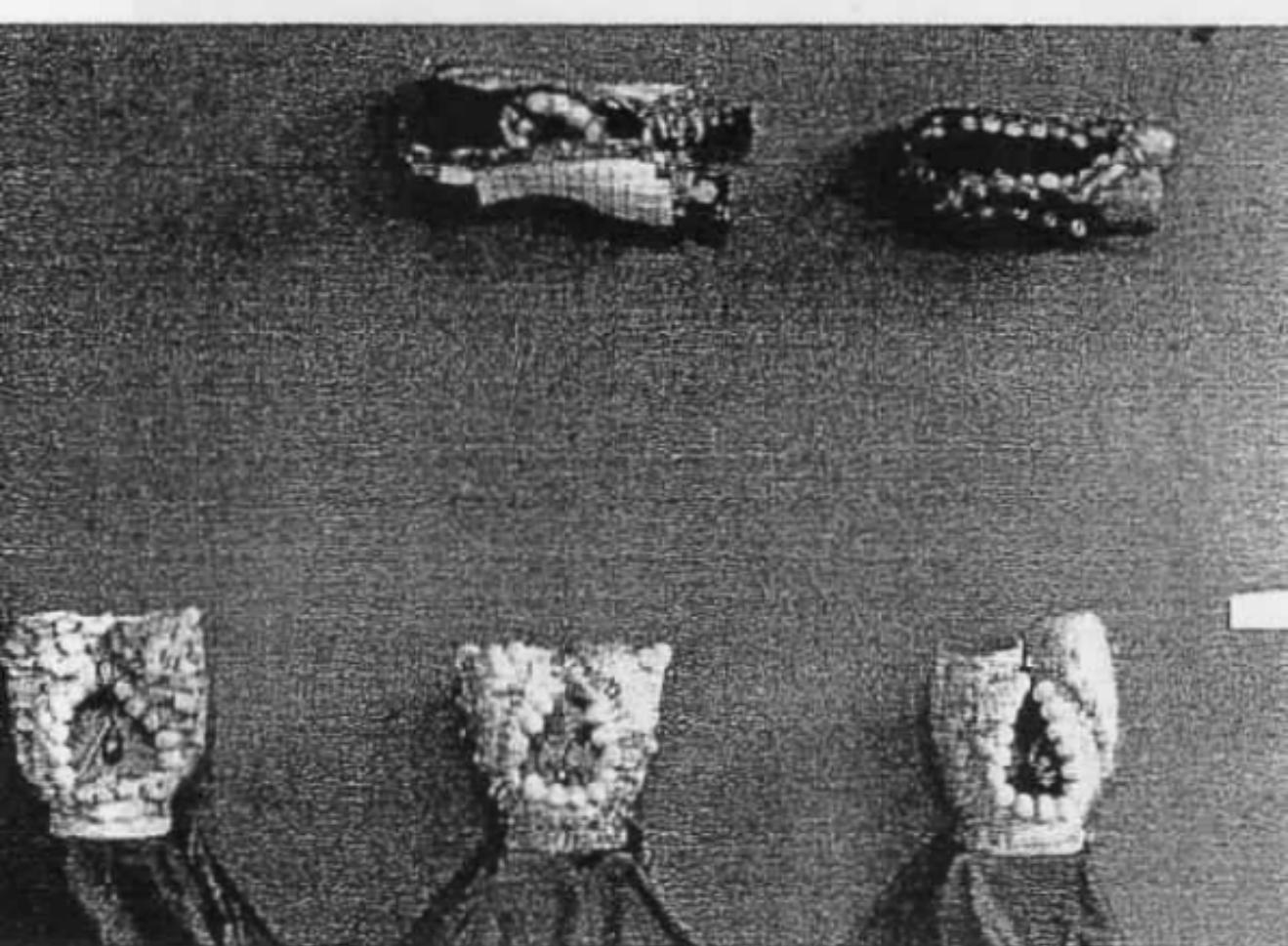
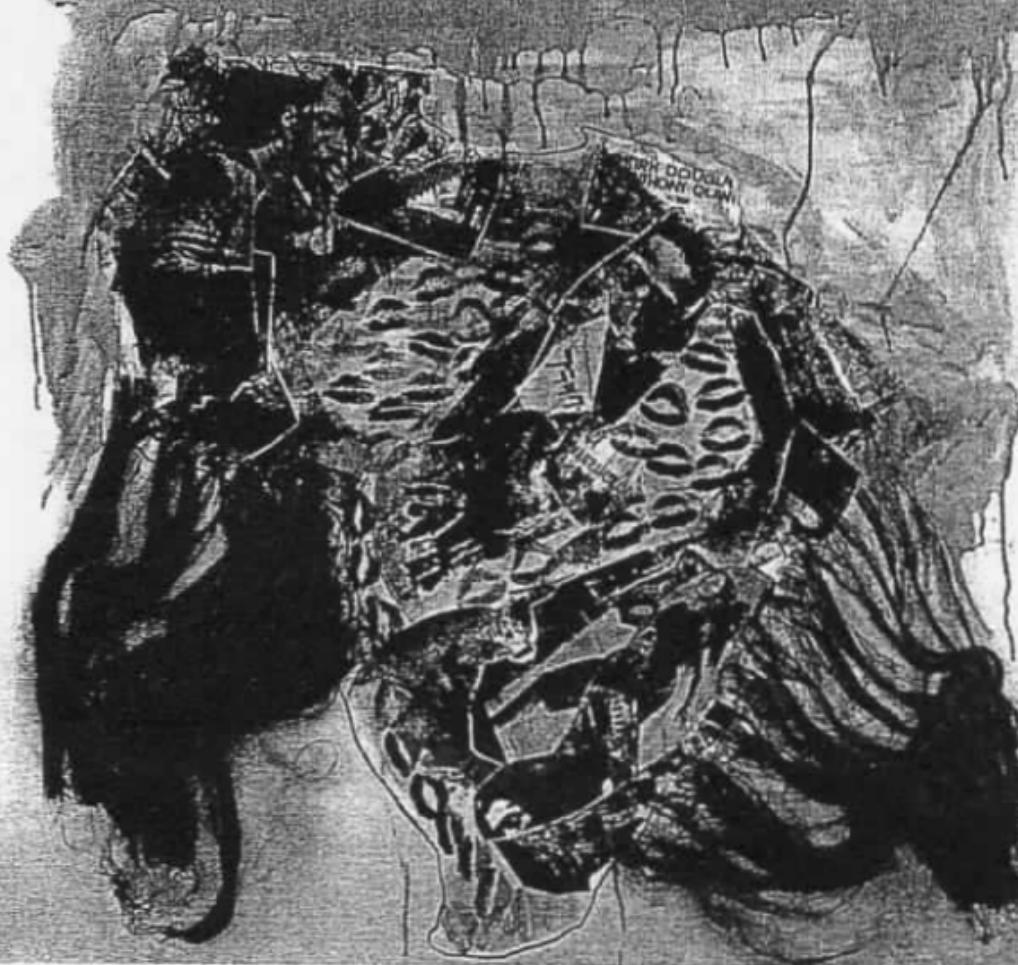


圖6 田部光子《壬王胎盤》1961年



圖二、南部沿岸《威爾斯》(Wales) 1920年

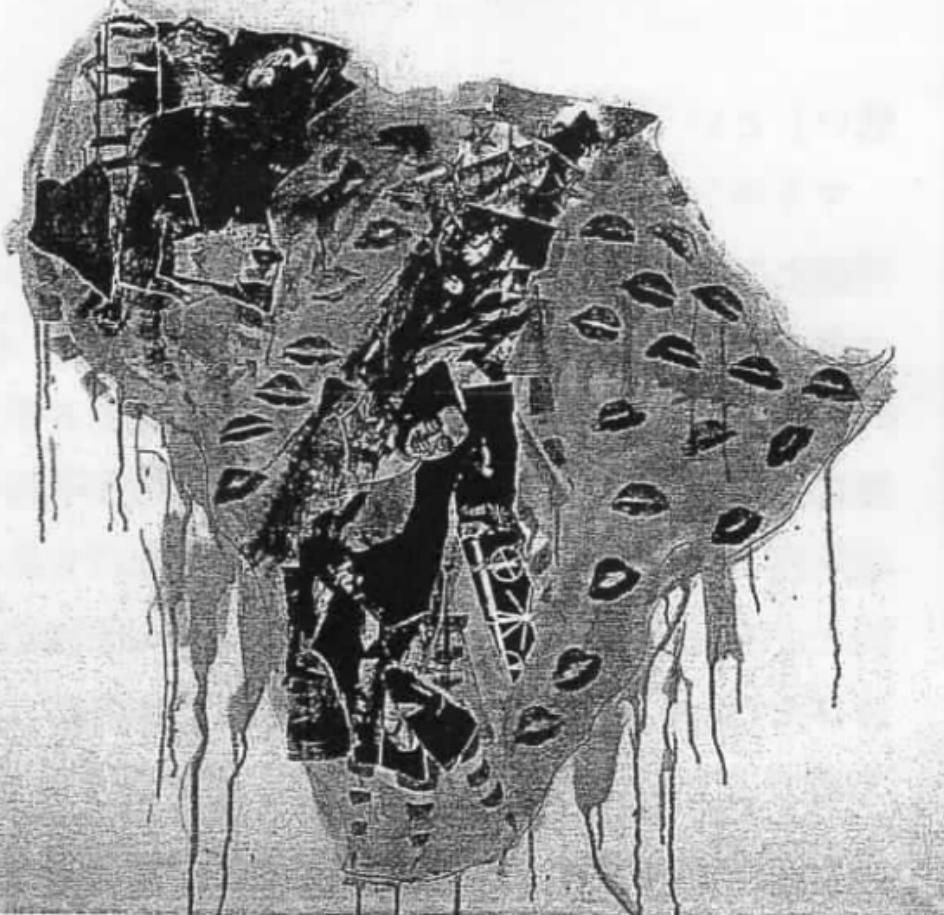


図8 田部光子《プラカード》1961年

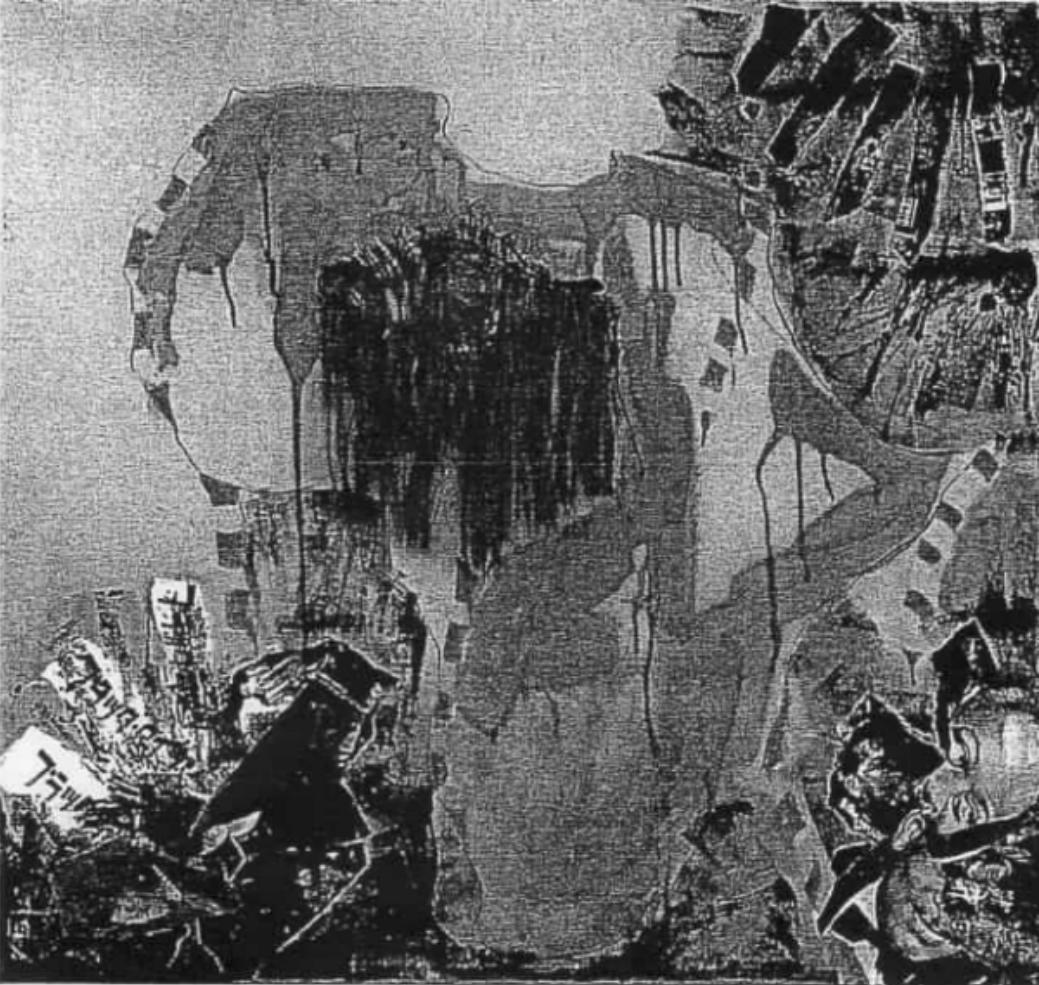


図9 田部光子《ポートレート》1961年

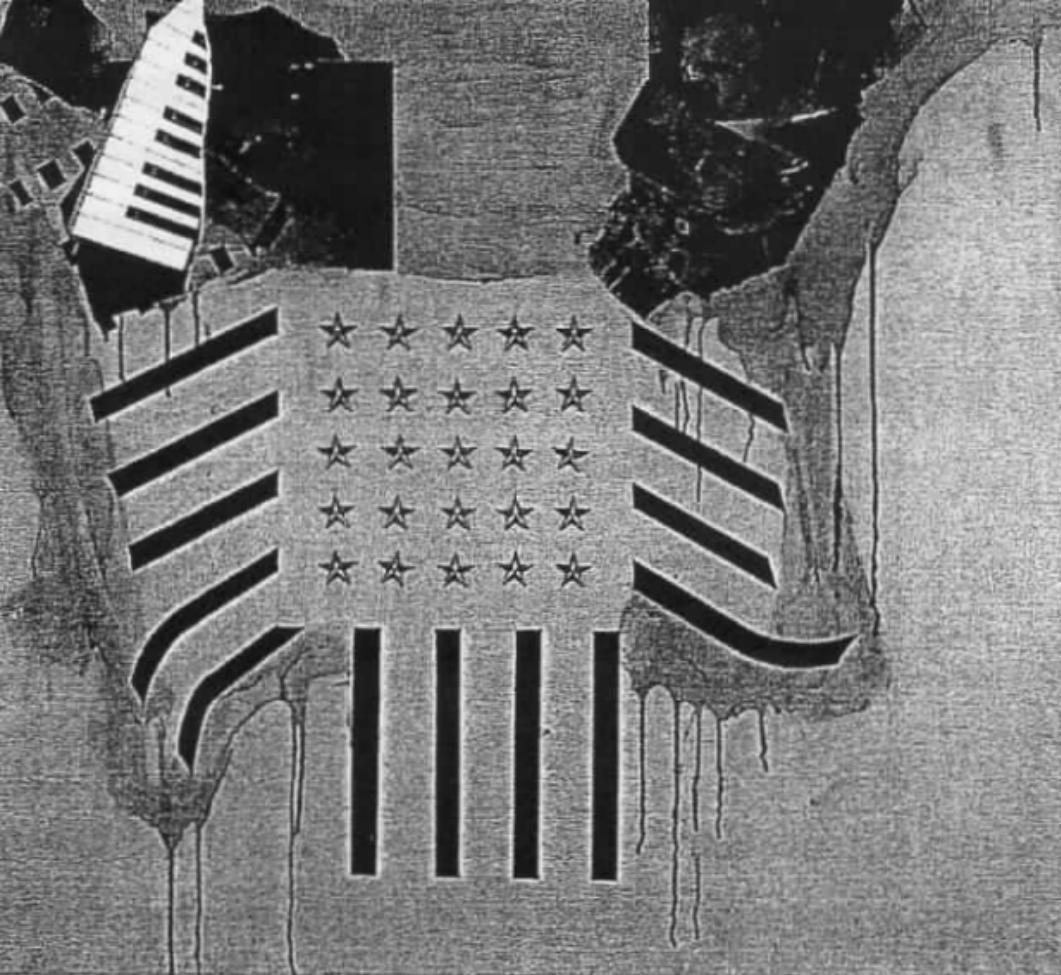


図10 田部光子《フラカード》1961年

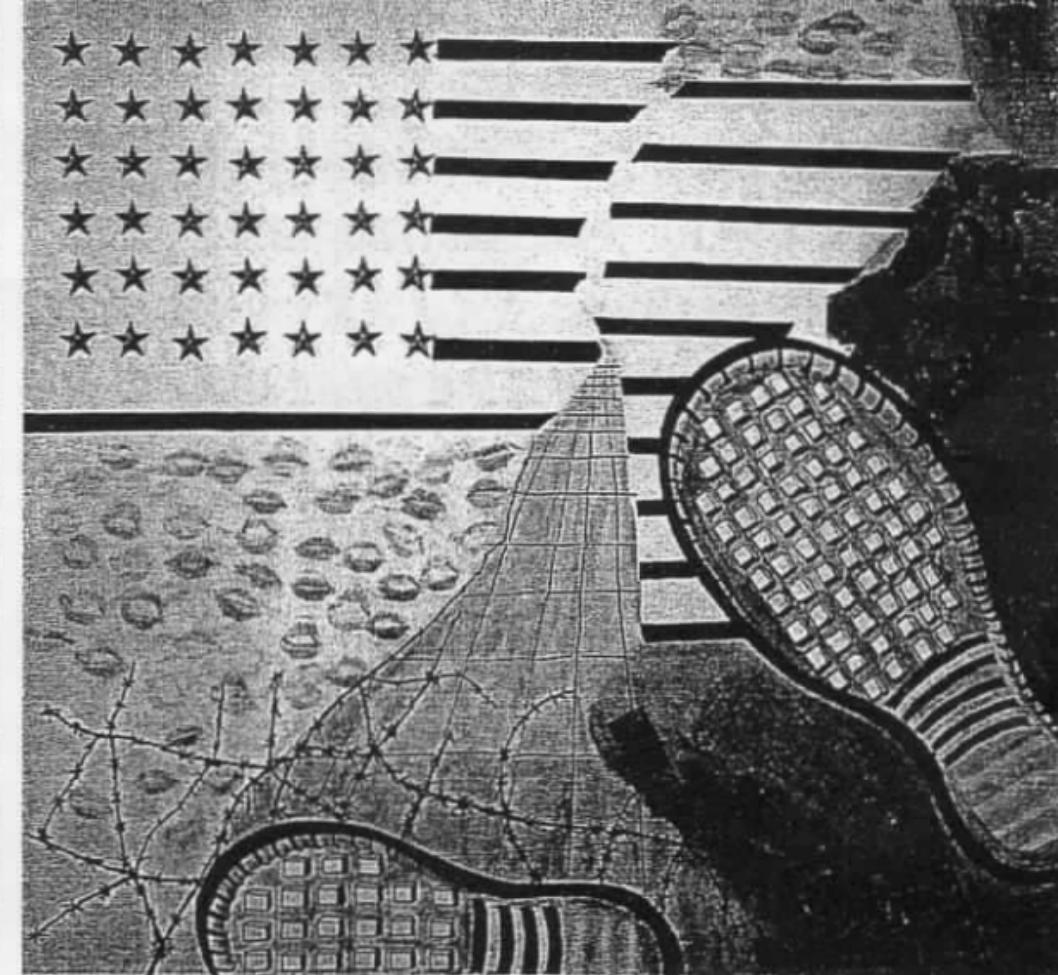


図11 田部光子《フラカード》1961年



図12 田部光子と作品、1961年、銀座画廊（東京）にて

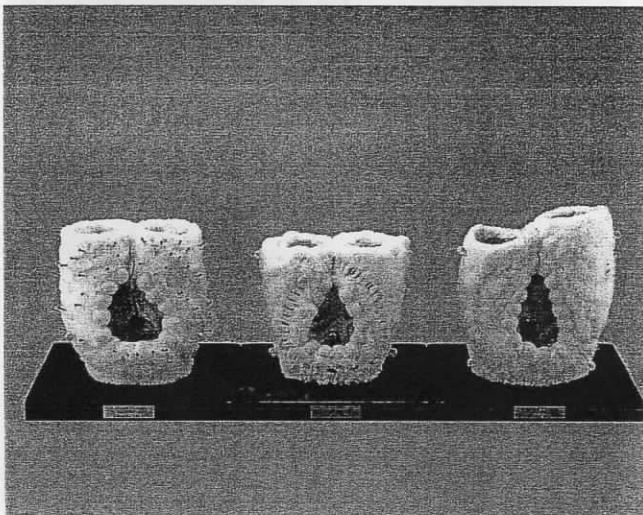


図13 田部光子《人工胎盤》1961年／再制作2004年、熊本市現代美術館蔵

覆われた外皮により、ベビー用品のような愛らしさが際立つ。むろん再制作品でも、赤く塗られた釘や銀の釘が多数打たれていて、そこに女性の妊娠に伴う痛みを敏感に感じ取る、現代の観客もいるという<sup>16</sup>。

田部の回想によれば、「まだ、ウーマンリブもフェミニズムもジェンダーも日本に入ってきていない頃だったので、重要な発言をしているのに女性からの反応はゼロ。」<sup>17</sup>だったという。実際、1961年というオリジナルの制作年はとび抜けて早く、ウイメンズ・リヴァの波が起こるのはアメリカでも60年代後半からである。アメリカ・フェミニズムの古典とされるジュディ・シカゴの《ディナー・パーティー》<sup>18</sup>でさえ、1974-1979年制作であるから、《人工胎盤》の先駆性は際立つ。田部自身、「四十年も前にわたしが考えた『人工胎盤』という女性解放の作品は、発想は天才的だが、作品としての完成度が低い。(略)もしこの作品が高度の技術を駆使した洗練されたものであったならば、作品は美術界に流通することができただろう。」<sup>19</sup>と書くが、作品の「完成度が

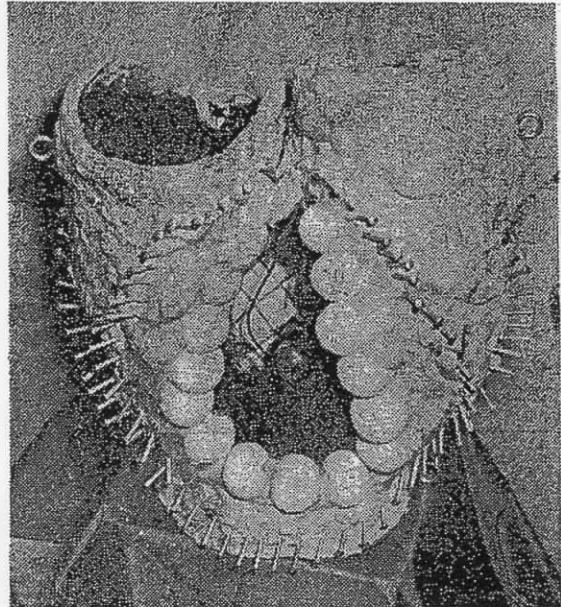


図14 「具象と抽象の間。田部光子『無題』、『土曜漫画』より

低い」というのは謙遜であろう。

マネキンの腰の部分を切り取り、上下逆にしたものをお外殻として、綿や脱脂綿により女性の肉体のもろさ、傷つきやすさを示し、ピンポン玉の球で卵のイメージを、内部に突き出した真空管で男性器を象徴する手法は独創性に富んでいる。器のイメージは、胎児と子宮を繋ぐ盤状胎盤というより、子宮そのもののように見える。串刺しとも形容されるような、オリジナル作品に打たれたおびただしい数の太い釘は、女性の肉体の痛みを象徴して迫力に富む。再制作からは外された胎児のオブジェ2点が壁に掛けられているのが当時の写真で確認され(図6)、妊婦であった田部の、女性の生理に対する驚くべき沈着な観察者としての視点がうかがえる<sup>20</sup>。

これは実際に妊娠中の女性を作者とした作品として、世界でも稀なジェンダー意識による、先駆的作品と言えよう。足りなかったのは「作品の完成度」ではない。問題にすべきは、女性にのみ負わされた妊娠・出産という役割と表現者としての「女性解放」の意欲の齟齬への、男性批評家の感受性の欠如であり、批評言語の不在であるといえよう。ジェンダー意識を持った女性批評家はこの当時まだ存在していなかった。フェミニズムという言葉はなくとも、女性の側からの解放の意識は古代から現在まで、各時代に応じて存在していた。それをきわめて鮮明に可視化したのが田部光子の作品の功績であろう。批評による言語化がなされなかつたために、当時からごく最近まで、その先駆性に見合った正当な評価がなされなかつたのである。

同じ展覧会に出品された《プラカード》5点(図7-

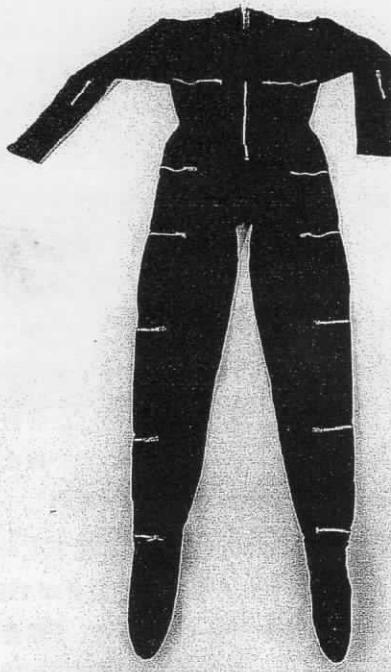


図 15 田部光子《裏と表》1963年

11) はオリジナル作品が現存し、今も作家が大事に保存している。労組のプラカードが、「右翼のそれと似かよって」、「古くさい」のに対して、「大衆のエネルギーを受け止められる」、「高らかな笑いのもとに星条旗を破る為のカンパニアが組織でき」<sup>21</sup> るようなプラカードとして構想されたという。1960年に独立したばかりのコンゴを讃えるため、アフリカ大陸の地図が黒いキスマークで覆われ、その両側からマネキンの赤毛の髪が植え付けられたり、アフリカ地図の真ん中に貼られた赤い髪の下に女性器の写真が隠されていたり、星条旗とピンクのキスマークと鉄条網にかぶさって大きな靴跡が押されたりという、社会性とエロティシズムへの田部の関心が混交した、意気盛んで情熱的なプラカード（政治的・性的看板）が5枚も作られた。これらは裸を支持体としている。田部の制作はタブローを越えて自由に広がって行く。

田部の、女性の身体をテーマとした制作はその後も続く。1962年11月、九州派の活動の転回点となった「英雄たちの大集会」では、田部はマネキンに釘を打ちつけるというハプニングを計画したが、マネキンが固くてうまく打てないため、スタッキングをはかけたマネキンの脚を並べた空間を作り、「九州派女性群独特の色情狂的な躁動的祭儀の聖堂」<sup>22</sup> と、このイベントに東京から参加した美術評論家ヨシダ・ヨシエに評された。残念ながら、田部の展示写真は残されていない。

1963年の、最後になった第15回読売アンデパンダン



図 16 最後の九州派メンバー

展に、《裏と表》（図15）と題した、ファスナーが体の両側に横に6列、腕の部分に1列付いてポケット状になったボディー・スーツを出品、このときは窓のプラインドに吊るして展示されたが、後に1968年福岡のRKB毎日放送の企画「九州派再発見 九州の前衛美術」に出演して、このボディー・スーツを仲間の女性画家が着用してハプニングを行なった。田部によれば、「最初にヴィーナスの石膏像を金づちで割り、タイツを着た谷口路子が長い髪を梳き続ける、わたしがそれをぐるぐるしばるという、あまりわけのわからないハプニング」<sup>23</sup> だったという。

ここで注意しておきたいのは、女性の身体をテーマにした作品でも、作者が女性であるとき、通常、男性批評家が受け取るのとは違う意味が込められているということだ。すなわち、男性にとって女性の肉体が「色情狂的な」誘惑の対象とみなされるときも、田部にとっては釘を打ち、金づちで叩き壊したい「美の規範」（ヴィーナス）であったり、自分の自由な精神を閉じ込める牢獄であったりするということではないか。女性身体の「裏と表」とは、滑らかな表面（皮膚）とその裏側の肉の即物性を端的に示すが、それもまた女性本人と他者としての男性では受け止め方が異なるのは当然であろう。

そして最後に注目しておきたいのは、事実上の最後の九州派グループ展となった1968年5月の「グループ連合による芸術の可能性展」である。これはフクニチ新聞の記者、深野治の企画によるもので、小幡英資の提案により「セックス博物館」というテーマで、作品が制作・展示されたという（図16）。

ここに田部は男性器の形をしたコケシのオブジェと、抱き合う裸の男女と巨大な乳を哺乳瓶に搾る女性の下半身を大きな鏡に描いた一対の作品《セックス博物館》を出品し、ミシンで長い紐（男性器）を縫うというハプニングを行なった。虹色に塗られた洗濯機の水の中には、

ひょうたんにへその緒をつけた「生まれ出でなかつた胎児たち」を入れて回し続けたという<sup>24</sup>。桜井孝身、石橋泰幸、大山右一、小幡ら男性作家が、小幡のプランに応じて各自《プリン》と題して巨大な男性器をかたどった立体（図16の写真の壁に立てかけられた作品）を制作し、わかりやすい「男根優位」思想を示したのに対して、田部の「セックス」に対するイメージは、性交そのものではなく、その行為の結果としての生殖、受胎に向かっている。それは巨大な鏡の作品《セックス博物館》にも明らかだろう。性の快楽の帰結としての妊娠・出産・授乳は女性だけに負わされている。自身が会場でミシンを踏み続けることにより、「主婦の内職により日本経済が成り立っているという、女性の力」を強調し、洗濯機の中のひょうたんにより、経済的な理由で堕胎された「生まれ出でなかつた胎児たちへのレクイエム」を示す<sup>25</sup>という構想も、企画者の小幡の「セックス博物館」の企図をおそらく大きく逸脱するものであったことだろう。ここに《人工胎盤》から続く、セックスに対する女性の側からの先鋭な問題意識によるアートという、田部作品の基本的な特徴を指摘しておきたい。

### 3.まとめ

以上、本稿では主に1950年代末の田部光子の画家としての出発から、九州派時代と重なる60年代の活動について、その特徴を掲げてみた。すなわち、水爆実験、水俣病の時代を出発点として、本稿では触れられなかつた三井三池炭坑争議やベトナム戦争などに敏感に反応する社会的問題意識と、女性だけに課せられる妊娠や出産という性に伴う義務に対するジェンダー的な問題意識を制作動機として、アスファルト・ピッチ、オブジェ、コラージュ、ハプニングといった、当時の前衛美術の先端である斬新な手法を使って、社会性とジェンダーを渾然と融合させたのが、他の九州派の作家たちとは異なる、田部独自の特徴と言えよう。

筆者は「前衛の女性1950-1975」という展覧会を企画・開催したが、その調査の中で、「前衛」という選民意識において「女性」はつねに他者であり、大衆の側にあって排除されるものだという、前衛グループの男性メンバーのエリート主義を強く意識せざるを得なかつた。むろんそうした選ばれた少数の「前衛芸術家」という神話も既に成立しなくなっていたことが、1962年当時から批評家によって指摘されていた<sup>26</sup>が、それでもなお戦後現代美術史は、前衛芸術運動の台頭と交替の歴史として、その後も記述されて來たのである。田部光子はその前衛グループ「九州派」の中で「評価が低く」、九州

派は「いじめの集団」だったと回想する<sup>27</sup>。九州派の作品が現在1割くらいしか残されていないことに対して、西日本新聞の田代俊一郎は、「九州派は作品を残すことよりも、運動そのものに意味と価値を、直線的に見えていた、ということが挙げられよう。残存率『一割』は、逆に言えば、運動の過激さ、純粹さの証左であろう。彼らは鉄砲ダマ（作品）を撃ち続け『美術の革命』という運動に殉じようとしたのではないか。」<sup>28</sup>と、美しく讃える。

しかし田部光子の芸術を評価するには、こうした前衛の「英雄的」悲壮感とは別の視点が必要であろう。それは、「反権力」「反芸術」「反東京」を掲げた芸術運動を英雄的に讃えるような「マッチョ」的視点ではなく、運動の熱気の渦中から一步離れて、冷静に観察しつつ、ジェンダーの表現に軽やかなユーモアを加味するような視点であるように思う。すなわち、田部自身が1999年にアメリカの大学での講演で語ったような、「非芸術で遊ぶ」<sup>29</sup>という境地こそが、田部芸術の理想の到達点ではなかろうか。

九州派が解体して後、反万博に始まる過激な政治性を帯びた「集団蜘蛛」の活動に同伴して8ミリ映像を残し、九州女流画家展を主宰し（1974-84年）、地球郵便局を開設したメール・アート、ポックス・オブジェや〈Apple Series〉のコラージュ、手話を使った〈Sign Language Series〉など、1970年代から現在に至るまで、田部光子の活動はたゆむことなく続いている。それについて語るのはまた別の機会としたい。

（栃木県立美術館学芸員）

### 註

- 1-田部光子「二千年の林檎 わたしの脱芸術論」、西日本新聞社、2001年、p.129
- 2-前掲書、p.190
- 3-企画展示室常設展示「九州派展」、2001年。シリーズ「九州派再訪-1」、2006年。「九州派再訪-2」、2007年。福岡市美術館。
- 4-「前衛の女性1950-1975」展関連企画シンポジウムでの発言。栃木県立美術館、2005年8月7日。
- 5-田部光子展トーケイイベント「前衛の彼方に」、ギャラリー58、2008年1月19日、田部光子の発言。
- 6-「第2回九州アンデパンダン展（1959）会場&作品」と表紙に手書きで書かれた写真の冊子のコピーによる。福岡市美術館九州派資料より、山口洋三氏提供。
- 7-田部光子、前掲書（註1）、p.21。
- 8-水俣市立水俣病資料館のホームページによる。  
<http://www7.ocn.ne.jp/~mimuseum/>
- 9-有機水銀説に対してチツォは反論し、厚生省食品衛生調査会が有機水銀化合物を水俣病の主因として厚生大臣に答申したのは、1959年11月12日であった。前掲（註8）資料。
- 10-新聞記事見出しによる水俣病関連年表。熊本大学附属図書館ホームページより。  
<http://www.lib.kumamoto-u.ac.jp/suishin/minamata/5chronicle/index.html>

- 11—河野信子・田部光子共著「夢幻の人—石牟礼道子の世界」藤原書店、1992年。
- 12—前掲書（註11）、pp.113-123。
- 13—該当する記事部分のカラーコピーを田部光子氏により提供を受けた。
- 14—田部、前掲書（註1）、p.21。機関誌「九州派」5号にも、田部は制作意図を、「人工胎盤ができたら、はじめて女性は、本質的に解放されるのだけれど。」と書いている。1961年9月10日発行。「美術ジャーナル」No.43、1963年8月号に再録、p.5。
- 15—アスファルト・ピッチは再制作では使われていない。使用材料は、マネキンのお尻部分、ピンポン玉、合成綿（4種類）、真空管（60年、70年代のもの）、電気コード（3種類）、ヒートン、特殊釘、ベビーラビット風の合成布。田部光子氏提供の再制作資料より。
- 16—熊本市現代美術館での展示に対する観客の感想。ギャラリー58、トークイベント、田部光子の発言より。
- 17—田部、前掲書（註1）、同頁。
- 18—2007年7月、女子美術大学で開催されたジュディ・シカゴ講演会に田部は参加し、シカゴの作品の「権威主義的窮屈さ」を批判する文章を発表している。田部光子「ジュディ・シカゴ『ディナー・パーティ』に思う」、西日本新聞、2007年9月3日。
- 19—田部、前掲書（註1）、pp.26-27。
- 20—田部自身、以下のように自分の「強さ」を回想している。「びびった」のは男たちの方であつただろう。「九州派の仲間が我が家にやってきて、こんなグロテスクな作品を作っていたら変な子供が生まれるバイといわれたことは記憶にあります。それでもビビらずに作ったのは、若さと強さですかね。」、年譜1961年参照。
- 21—田部光子「プラカードの為に」、機関誌「九州派」5、1961年9月10日発行。「美術ジャーナル」No.43、1963年8月号に再録、p.5。
- 22—ヨシダ・ヨシエ「『九州派』の英雄たち」「解体劇の幕降りて—60年代前衛美術史」（「戦後前衛所縁荒事十八番」増補改題）、造形社、1982年、p.152。
- 23—ギャラリー58、トークイベントでの田部光子の発言と、筆者の問い合わせに対する回答より。
- 24—筆者の質問への田部光子の回答、2007年1月。年譜参照。
- 25—筆者の質問への田部光子の回答、2007年1月。年譜参照。
- 26—針生一郎「前衛芸術に疲れました」、「芸術新潮」、1962年8月、pp.148-153。中原佑介「前衛のゆくえ」、「美術手帖1962年鑑」、1963年、pp.61-68。
- 27—田部、前掲書（註1）、「九州派を放談する」、p.182。
- 28—田代俊一郎「駆け抜けた前衛 九州派とその時代」、花書院、1996年、p.67。
- 29—「非芸術で遊ぼう」、アディロンダック大学（ニューヨーク州）、1999年のレクチャーのタイトル。

## 図版出典

図1 「九州派」2

図2～5、7～11、13、15 「前衛の女性 1950－1975」展力タログ、栃木県立美術館、2005年

図6、12 「田部光子 Recent Works」、ギャラリーとわーる、2002年

図14 「土曜漫画」1961年10月20日号、p.32

図16 「九州派」展力タログ、福岡市美術館、1988年、p.107

## 田部光子 履歴・展覧会歴

「九州派展 反芸術プロジェクト」カタログ（福岡市美術館、1988年）掲載の年表（作成：黒田雷児）、および企画展示室常設展示シリーズ「九州派再訪一」、「九州派再訪二」パンフレット（福岡市美術館、2006年、2007年）掲載の九州派関連年表（作成：山口洋三）を基にして、各種資料や小勝の質問に対する田部氏の回答により、訂正もしくは追記した事項をアンダーラインで明記した。社会・政治の事項については、『年表 女と男の日本史』（藤原書店、1998年）ほかを参照した（敬称略）。

資料提供：田部光子、福岡市美術館山口洋三、ギャラリー58

作成：小勝禮子 2008年3月

	履歴・展覧会歴	社会・美術全般
1933年	日本統治下の台湾台東に生まれる。父、石橋光五郎は台湾總督府の衛生局官吏。母キミは裁縫の先生で、自宅で仕立物をした。兄、姉のいる3人兄妹の末子。兄、和美も画家となる。	
1946年	終戦のため福岡に引き上げ。 「父は衛生局で台湾の人のマラリヤ、チフスの予防に取り組んでいた。敗戦の後も現地の人が、米俵や砂糖など、終戦の夜に運んでくれました。中国政府からも残ってくれと言われたそうです。」（田部光子の回答、2007年1月）	
1951年	3月 福岡県立浮羽高等学校卒業。 「浮羽高等女学校は名門。6・3・3制で男女共学となり、2年に編入。受験クラスのみ、男子校に行きました。しかし（卒業の時）福岡学芸大学（現・福岡教育大学）の推薦を断ったのは、今でも正解だと思います。教大に行っていたら、学生運動に呑まれて、もう死んでいるかも知れません。」（田部光子の回答、2007年1月） 高校時代、尾花成春の「ともだち座」という演劇活動に刺激され、「アラジンの不思議なランプ」等を脚色、衣裳、装置等、全部自分たちで調べ、リヤカーを引いて近くの中学校の講堂で公演して回る。（田部「着信人払い郵便局」pp.155-156）	
1953年	岩田屋百貨店入社。在職中、岩田屋の済美会絵画部にて上田新（二紀会）らとヌードモデルを雇いデッサンを学ぶ。またサルトルに傾倒し、フランス語のサークルにも入る。 岩田屋勤務の頃、早稲田大学に入学して政治家の秘書になっていた兄、和美が結核を患い、画家に転向。帰郷して光子の絵を見てくれたりした。（田部光子の回答、2007年1月） 第9回福岡県美術展（岩田屋）出品。～1957年第13回展まで。	3月1日 第五福龍丸、ビキニ水域でアメリカの水爆実験により死の灰被災。
1954年		
1955年	この頃、富山妙子（画家。当時、自由美術協会に所属。炭鉱の絵を描いた先駆的女性画家）の筑豊地方の田川炭坑などの取材に同行して、録音機をぐるぐる回して炭鉱の労働者の話を録音する助手を務める。 「自由美術展に出品したのは、富山さんが好きだったからです。自由美術の方が福岡まで会いに来てくれました。《プラカード》という作品には（富山さんから）影響受けたと思います。炭坑でのチラシの切れ端がコラージュされていますから。」（田部光子の回答、2007年1月）	

1956年		5月9日 水俣病公式発見。 7月 経済白書「もはや戦後ではない」 三種の神器「白黒テレビ・電気冷蔵庫・電気洗濯機」。テレビの影響が「一億総白痴化」(大宅壮一)と評される。
1957年	<p>3月 29日 - 5月 18日 岩田屋争議。石橋(田部)も組合員としてストに参加。経営側もロックアウトで対抗した。</p> <p>8月 14 - 18日 「グループQ18人展」岩田屋ホール 石橋(田部)出品</p> <p>10月 12 - 30日 第21回自由美術展 石橋(田部)出品 (九州派)2)</p> <p>11月 「第1回西部女性美術展」(主催:朝日新聞社)岩田屋ホール、石橋(田部)出品、《ヤマトタケルノミコト》油彩、アスファルト・木、192×192cm、1956年と推定 (『田部光子 Recent Works』図版掲載、p.11)、福岡市美術館寄託</p>	<p>2月 25日 - 3月 12日 「第9回読売アンデパンダン展」、九州派メンバー、石橋泰幸、越智靖(オチ・オサム)、桜井孝身が初出品。</p> <p>3月 5 - 10日 「世界・今日の美術展」岩田屋ホール (東京展:日本橋高島屋、1956年11月13 - 25日、大阪展:大阪高島屋、1957年1月15 - 20日の巡回)</p>
1958年	<p>1月 岩田屋を退職。</p> <p>3月 田部健二と結婚。自宅で絵画教室を始める (1982年頃まで)。</p> <p>4月 20 - 27日、「第1回九州アンデパンダン展」西日本新聞社講堂、石橋(田部)《魚族1, 2》(機関誌「九州派」2、図版とコメント掲載の作品?)</p> <p>針生一郎が初めて来福。</p> <p>8月 2 - 7日、第2回「九州派グループ展」銀座画廊、東京。石橋(田部)《繁殖1 - 4》。</p> <p>兄、石橋和美が制作者懇談会 (1955年4月結成) に所属し、その関係で針生一郎、池田龍雄が九州派展を訪れる。(田部「二千年の林檎」pp.188-189)</p> <p>針生一郎「時評的評論」(『みづゑ』9月号、No.660、p.75) 九州派展の展評、「石橋光子は魚のウロコか石垣のようなかたちをつみあげて、生きものとメカニックな力との葛藤をとらえている。」(これは、『魚族の怒り』の様式に対する批評のように読める・編者)</p> <p>10月 12 - 30日 第22回自由美術展 石橋(田部)《繁殖する》</p> <p>11月 14 - 16日 「九州派街頭展」福岡県庁西側大通り壁面、田部出品</p> <p>11月 25 - 30日 「第2回西部女性美術展」岩田屋ホール。石橋(田部)《魚族の怒り》50号① 岩田屋賞1席 (『怒れる魚族』という表記の新聞記事あり、朝日(?)福岡県版11.23、掲載紙不詳「学芸」欄 11.24)</p> <p>12月 12 - 14日 「九州詩画展」福岡丸善画廊、田部出品</p>	<p>3月 12 - 27日 「第10回読売アンデパンダン展」。九州派、15名による合同制作など、個人とグループで出品。</p> <p>7月 熊本大水俣研究班、窒素工場排水中の有機水銀が水俣病の原因と報告。</p> <p>11月 宮内庁、皇太子と正田美智子の婚約を発表。ミッキー・ブームに。高度経済成長期 (~78年)に入る。</p>
1959年	<p>2月 18日 - 3月 1日 「第12回日本アンデパンダン展」東京都美術館、日本美術会主催。田部《ジャン・ジュネへ》《魚族の怒り》(不明)。</p> <p>日本美術会のアンデパンダン展には田部はこのとき1回のみ出品。「それはわたくし一人で出品しました。あまりにも社会性(尾藤豊など)が表面に出ていて、面白くないと思いました。ここでもひねくれていますね。」(田部光子の回答、2007年1月)</p> <p>3月 1 - 29日 「第2回西日本洋画新人秀作展」石橋美術館、田部《魚族の怒り》50号①</p> <p>5月 3 - 10日 「第2回九州アンデパンダン展」西日本新聞社講堂、石橋(田部)《ジャン・ジュネへ》、《魚族の怒り》100号②、デッサン3点</p> <p>8月 21 - 26日 「第3回九州派グループ展」銀座画廊、石橋(田部)《魚の笑いA、B》</p> <p>10月 12 - 30日 第23回自由美術展 石橋(田部)《繁殖する》</p> <p>嘉門安雄評「石橋の丸い穴のあいた筒状の素材の画面埋め込みは、数が多くて一見アリ塚のような気味悪さもあるが、しかしそこに明るい叙情のリズムが呼吸している。」産業経済新聞、10.27</p> <p>11月 10 - 15日 「第3回西部女性美術展」岩田屋ホール</p> <p>田部(ここで初めて出品リスト、新聞記事に石橋ではなく、田部光子と表記される)《魚族の怒り》100号②、朝日銀賞1席</p> <p>「『魚族の怒り』は追求はしているが、アピールするものがうすれている。」海老原喜之助の評、朝日新聞、11.10</p>	<p>2月 18日 - 3月 1日 「第11回読売アンデパンダン展」石橋、オチ、桜井他、九州派7名出品。</p> <p>4月 28日 皇太子ご成婚。成婚パレードをテレビ各社で中継。</p> <p>11月 水俣の漁民、新日本窒素工場に乱入、警官隊と衝突。</p> <p>12月 三池鉱山、指名解雇通告。三井三池争議開始。</p>
1960年	<p>2月 27日 - 3月 20日 「第3回西日本洋画新人秀作展」石橋美術館、田部《魚族の怒り》100号②、金賞。</p> <p>「金賞の田部の作品は魚をモチーフにしたものだが、およそイメージと技術との一つの頂点を示していて格幅(ママ・恰幅?)のある画面となったが、もうこのフォルムから抜け出ることがこの人には必要である。」岸田勉、西日本新聞、2.29</p> <p>3月 1 - 16日 「第12回読売アンデパンダン展」東京都美術館、田部《不況》(図版掲載:九州派展カタログ、p.76)、田部が初めて出品した読売アンパン展。</p> <p>6月 15日 「第1回全九州アンデパンダン展」八幡市美術工芸館、田部《ヤマの怒り》3点(図版なし)。</p> <p>10月 22 - 27日 「第4回西部女性美術展」、田部出品(佳作?)。</p> <p>掲載紙、月日不明の新聞(朝日?)「美術評」、「…田部の作品には茶碗の糸底がそれぞれ異物としての効果を出している」</p>	<p>1月 19日 ワシントンで日米安全保障条約(改定)、付帯条約調印。</p> <p>針生一郎が九州派の名を挙げてアンデパンダンへのグループ参加を邪道として批判。座談会「反絵画・反彫刻・反批評」東野芳明、針生一郎、江原順、『みづゑ』4月号、p.81。</p> <p>東野芳明の工藤哲巳の作品に対する読売新聞評により、「反芸術」という言葉が広まる。</p> <p>6月 15日 デモ隊国会突入で樺美智子死亡。</p> <p>6月 19日 安保「自然承認」。</p> <p>7月 14日 岸首相、右翼に刺されて翌日総辞職。池田内閣成立。</p> <p>8月 8 - 13日 「九州派個展」銀座画廊、田部不出品。</p> <p>10月 12日 浅沼稲次郎社会党委員長刺殺。</p> <p>11月 三井三池争議完全解決(労働組合側の敗北)。</p> <p>12月 「国民所得倍増計画」決定。</p>

1961年	<p>3月2—16日 「第13回読売アンデパンダン展」東京都美術館、田部《同族同志》2点（図版掲載：九州派展カタログp.81、ロープを使った作品）      「これだけは、針生が後家の頑張りだと言ったと、桜井さんがうれしそうに言った時、菊畠さんが、いや、あれは良い作品だと誉めてくれたのを覚えています。」（田部光子の回想、2007年1月）</p> <p>9月14—19日 「九州派展」銀座画廊（東京で3回目、最後）、田部《プラカード》5点、《人工胎盤》      「土曜漫画」10月20日号「女性器にいどむ芸術家たち」pp.32-33、江原順「画廊から」      「オモチャ箱をひっくり返したような野方（ママ）団なお遊びを催している。（中略）…田部光子のグロテスクな生理的形態のオブジェ、…それぞれおもしろい可能性を感じられる。…もう少し自覺的なものにする方向が出てこなければ話にならない。」「みづゑ」11月号、p.76。      《人工胎盤》について「九州派の仲間が我が家にやってきて、こんなグロテスクな作品を作っていたら変な子供が生まれるやいわれたことは記憶にあります。それでもビビらずに作ったのは、若さと強さですかね。わたしは仲間うちでは、いつも評価は低かったです。わたしも育児と教室に追われていましたので、それでもいつも（仲間が）休まずに出品せよ、せよと言ってくれました。」（田部光子の回答、2007年1月）      反省会「明日を告示するものがなかった」→12月忘年会で3度目の解散、「九州派」6、1962年10月1日発行、p.1)      「あまり作品の批評はしなかったと思います。それよりも公募を選ぶか九州派を選ぶかの激論でした。もっとひどいのは、勤めや教室も止めるとオチが主張し、それに従った石橋さんの晩年は悲しかったですね。」（田部光子の回答、2007年1月）</p>	<p>2月1日 深澤七郎「風流夢譚」事件。      4月12—30日 「現代美術の実験展」東京国立近代美術館 オチ、菊畠出品。      「レジャー」が流行語になる（63年には「バカンス」が）。      熊本県水俣市海岸地帯に、胎児性水俣病患者が確認される。</p>
1962年	<p>1月2日 長男誕生。</p> <p>3月2—16日 「第14回読売アンデパンダン展」東京都美術館、田部《作品》（福岡市美術館所蔵品 cat.no.1773）</p> <p>7月21—23日 「九州派展」中屋デパート（福岡）、13人出品 田部出品（《プラカード》か？）。</p> <p>11月15—16日 「英雄たちの大集会」百道（ももじ）屋、百道海水浴場（福岡）、田部参加 マネキンに釘を打つハブニング。      「脱衣場の二階は、九州派女性群独特の色情狂（ニンフォマニア）的な躁的祭儀の聖堂と化していた。マネキンの首や乳房や、すらりと伸びた足とストッキング、それにヌードのフォト・コレージュをスクリーンにした田部光子の触覚的環境で…」ヨシダ・ヨシエ「九州派」の英雄たち「解体劇の幕降りて—60年代前衛美術史」（戦後前衛所轄荒事十八番 増補改題）、造形社、1982年、p.152</p> <p>「田部は、大量的マネキンに釘を打ち続けるハブニングを予定していたが、思うように釘が刺さらないで、ストッキングをはかせたマネキンの足を並べてエロチックな空間を作り、…」川浪千鶴編「宮崎準之助」展カタログ（福岡県立美術館、1998年）p.20      「マネキンが固くて、風倉さんが手伝ってくれて、しまいにトイレットペーパーをなんかを解きながら、マネキンをなでていたと思います。」（田部光子の回想、2007年1月）</p>	<p>3月 「女子学生亡国論」</p> <p>10月 キューバ危機</p>
1963年	<p>3月2—16日 「第15回読売アンデパンダン展」東京都美術館、田部《裏と表》 ファスナーがたくさん付いた黒いボディスーツ、ブラインドに吊るして展示。（「前衛の女性 1950—1975」展カタログ、cat.no.103）</p> <p>後のバフォーマンス</p> <p>①「九州派再発見 九州の前衛美術」 RKB毎日放送（1968年2月18日放送）      「（これについては）1968年とか、山口洋三さんが割り出したそうです。わたくしの演出だと思います。最初にヴィーナスの石膏像を金づちで割り、タイツを着た谷口路子が長い髪を梳き続ける、わたしがそれをぐるぐるしばるという、あまりわけのわからないハブニングでした。」（田部光子の回答、2007年1月）</p> <p>②「第6回コンテンポラリーアート展」（2005年？）ダンサー：マユミ・ウイスニスキーさん、「ダンスで「命」表現」（朝日新聞、年月日不詳の記事）</p> <p>*コンテンポラリーアート展 「福岡市美術連盟会員200人の中のノンセクション部門のみ、西日本シティ銀行1Fホールで毎年行う現代美術展（田部光子の回答、2007年1月）</p> <p>10月3—8日 「九州派展」美目画廊（東京）、田部（大正炭坑の鉱夫の写真を使ったオブジェ）</p> <p>12月13—15日 「九州派展」新天会館（福岡）、田部《作品》</p>	<p>7月 東京都主唱、オリンピックのための「首都美化重点地域活動」開始。</p>
1964年	<p>2月1—2日 「渡米準備展」天神ビル（福岡）、大黒愛子、長穂と田部の3人展。田部《たったひとつの実在を求めて》（シリーズ5点）（福岡市美術館所蔵）</p> <p>林檎をかたどった最初の作品。田部にとって林檎は女性の身体を象徴するもの。（田部光子トークイベント、2007年1月19日、ギャラリー58）</p> <p>8月3—9日 「田部光子個展」夢土画廊（東京）、      「この個展の出品作品はよくなかった。終わった後、全部東京の兄の家に棄ててきた。」（田部光子の回答、2007年1月）</p>	<p>8月 米駆逐艦が北ベトナム軍に攻撃を受けたと発表（トンキン湾事件）。</p> <p>10月 東京オリンピック開催</p>
1965年	<p>2月15—20日 「九州派小品展」、田部出品。桜井渡米のための資金稼ぎか？</p> <p>8月3—8日 「10周年記念展 九州派」福岡県文化会館、田部《ベトナム絵画》迷彩色に塗ったベニヤ板6枚（図版：「九州派展」カタログp.101）</p> <p>4日間徹夜で描き、筆を洗うシンナーで中毒、抗生素質注射、意識が薄れる。（「前衛達の軌跡4 田部光子」吉田浩記者、1988.10.1 西日本新聞）</p> <p>「2時間死線をさまよう。ステロイド注射で一命を取り留める。余生の方が長い。」（田部光子の回答、2007年1月）</p> <p>本展会期中に九州派解散。</p>	<p>2月 アメリカ、北爆開始（ベトナム戦争～1975年まで）</p>
1966年	11月14日 次男誕生	
1967年	<p>2月21—26日 「九州・現代美術の動向展」福岡県文化会館、20人。5回まで開催。田部、第1回は不出品。</p> <p>6月 「九州派展」東京ギャラリー（サンフランシスコ）、田部出品。サンフランシスコ九州派第2回展。「ヴェトナム絵画を送った」（田部光子の回答、2007年1月）</p> <p>7月30日—8月6日 「詩画展PAPA」SNACK BOBO（ビオビオ）（福岡市）大黒、尾花、田部のほか、詩人の福森隆、今史郎、近藤源三と映画作家の柳原暢茂が参加。田部、尾花がヌードモデルに泡を塗りつけるハブニング。</p>	

	<p>9月 11 - 16日 「九州派女性作家展」櫻画廊（東京）、田部、大黒、長、野田紀美子      「女性らしく「結婚」をテーマに、妍ならぬ画技を競いあう。…意図しているように女性特有の嗅覚が今日的コミュニケーションのいとぐちをさがしあてるかどうか」（『美術手帖』9月号、展覧会案内、p.197。）</p>	
1968年	<p>5月 7 - 12日 「グループ連合による芸術の可能性展」福岡県文化会館、フクニチ新聞 深野治・企画      小幡英賀がリーダー、テーマ「セックス博物館」。九州派の名で展覧会に参加した最後のもの。      田部、男性器のかたちをしたコケシのオブジェ「10個出品して5個が会期中に盗られた」（田部光子の回答、2007年1月）      《セックス博物館》大きな乳房を抱えて乳を絞る女性、抱き合う男女を描いた鏡の作品（福岡市美所蔵品 cat.nos.1774-1775）。      田部がミシンでペニス（長いひも状）を縫う。「日本の経済は、主婦の内職によって成り立っているという、女性の力を強調したものです」（田部光子の回答、2007年1月）、KBC九州朝日放送「モーニングショー」で全国放送された。      小幡メモ「動く洗濯機に水と象徴物を入れる」（「九州派展」カタログ p.106）      田部の作品、「レインボー色に塗った洗濯機の中に、ひょうたんにへその緒をつけた「生まれ出でなかった胎児たち」」      「経済的な理由での墮胎が許されていたので、たいへん増えていました。その生まれ出でざる胎児たちへのレクイエムです。」（田部光子の回答、2007年1月）</p>	<p>5月 パリ五月革命      8月 ソ連など5カ国軍、チェコ侵攻</p>
1969年	「万博破壊九州大会」、「崎型三派狂乱大集会」の「集団蜘蛛」のハプニング+田部、8ミリ・フィルム撮影（「集団蜘蛛」の軌跡展）パンフレット、福岡市美術館、1997年）	1月 石牟礼道子「苦海淨土」刊行
1970年	3月 「可能性の意思展」（主催：北九州市教育委員会）、八幡市立美術館、田部《迷彩を施された風景》出品、ベトナム絵画、100号2点。	<p>3月～9月 日本万国博覧会開幕（大阪）      10月 日本のウーマン・リブ初めての街頭デモ      11月 25日 三島由紀夫、自決</p>
1972年		<p>2月 連合赤軍、浅間山荘事件      6月 田中角栄「日本列島改造論」</p>
1974年	11月 九州女流画家展を主宰、～1984年まで11年間。創立メンバー6人。 1980年第8回展より公募、受賞制度。大黒脱退。	
1981年	地球芸術郵便局を開設（福岡県文化会館）。22カ国から約2000点のメール・アートを集める。	
1987年	第2回地球芸術郵便局（福岡市美術館）。30カ国3000点。	
1988年	「九州派展 反芸術プロジェクト」福岡市美術館、出品。	
1991年～	ボックス・オブジェ制作。	
1993年～95年	〈Apple Series〉 油彩、コラージュ、金箔・板。	
1995年	「現代美術の手法、コラージュ」展、練馬区立美術館、出品。 11月 〈Apple Series〉の個展、Cast Iron Gallery, New York	
1995年～	コラージュ制作。〈One Hundred Notebooks of Collage〉	
1996年～98年	〈Sign Language Series〉油彩、石膏、コラージュ、金箔・板	
1999年	〈Sign Language Series〉の個展、Adirondack Community College, Bay Road, Queensbury, NY, U.S.A.	
2001年	9～10月、個展「天気予報図と万有引力の光子の世界」、ギャラリーOKUDAインターナショナル、ワシントンDC（2002年5～6月にも開催）	
2003年	「九州力展」熊本市現代美術館、出品。	
2005年	「前衛の女性 1950～1975」展、栃木県立美術館。 「りんごの秘密」展、ひろしま美術館。	

現在まで、福岡（ギャラリーとわーる）、東京（ギャラリー58）、ワシントン、ニューヨークで個展、グループ展多数出品。

著作：田部光子『着信人払い地球郵便局』葦書房、1984年

河野信子・田部光子共著『夢劫の人－石牟礼道子の世界』藤原書店、1992年

共著『女と男の時空 III 中世』藤原書店、1998年

田部光子『受胎藝術』花書院、1997年

田部光子『二千年の林檎－わたしの脱芸術論』西日本新聞社、2001年